





われるパウロがヨーロッパ伝道に足を踏み出したのは、アジア州(今日のトルコ)での伝道に行き詰ったからでした。この時、挫折したのです。使徒言行録第16章6節ではアジア州での伝道を聖霊によって禁じられたと記されています。計画通りに行かなかったことによつて幻を見てパウロをヨーロッパ伝道へと押し出したのです。

もし、パウロのこの行き詰まり、挫折がなければ、キリスト教が広がらず、日本にも伝わることはなかったのです。その時はマイナスに見えても、その挫折は大切だったのです。

人生を張り切って歩んでいる時の行き止まり、足踏み、挫折といった出来事は、人生の上で無駄な時間、マイナスの出来事としてとらえるのがわたしたち人間です。しかし、行き止まり、足踏み、挫折は、新しい世界への準備の時なのだ、聖霊の導きなのだということ。を日野原医師もパウロも経験し、わたしたちはその貴重な経験を伝えているのです。一旦、立ち止まって回りをよく見る機会を与えてく

ださったのです。この世的にはマイナスに思えることが、実はプラスなのだ、と聖書は繰り返したわたしたちに教えています。

わたしたしにとつても大学院に進んで挫折したことが無駄ではなく、その後の人生の糧となっていたのです。偶然そうなっていたのではありません。神様がするようにしてくださいました。

### 主の道は、曲がりくねった遠い回り道でも「まっすぐな道」

わたくしはその後、海洋開発という分野の企業に就職し、伴侶を得て家庭を持ち、仕事と子育てに追われてあつと言う間に13年が過ぎました。そこで会社の倒産という思わぬ事態に遭遇したのです。39歳でした。希望退職に応じて、友人の紹介で宇宙関連の小さな企業に転職しましたが、違う分野の仕事を始めるとには結構なエネルギーが必要でした。最初の数年間、大変苦労がありました。10年ほどして、やっと宇宙分野の仕事に慣れたころ、今度は親会社

が倒産したのです。勤めていた会社は他の企業の傘下にはいつて、なんとか生活が守られました。この頃でした。神様の声が聞こえたような気がしました。耳に響く声ではなく、心に響く声です。「牧師になつて、わたしの働き手となりなさい」という神様のお召しの言葉でした。しかし、すぐに仕事をやめて主イエスに従うことができませんでした。自分は教会の役員、教会学校の教師など、自分としてもできる限りの奉仕をしてきたつもりでした。また、高校生以下3人の子どもを育てていましたので、少し待つてくださいいと神様をお願いしたので。この優柔不断な私を神様はお赦してください、待つてくださいました。神様は忍耐深い方です。

数年後、ある日、幻を見ました。向う岸に行きたいものの、流れの速い小川を目の前にしながら、飛び越せずにいるわたしの背中を誰かがポンと押したので。向こう岸に飛び移って振り返ると、「ほら飛び越せたでしょう」と言うのです。イエス様だったに違いが

りません。時が満ちたのです。会社を辞し、夜に学ぶ日本聖書神学校で4年間学びました。昼に教会主事のアルバイトをしてから夜に学ぶことは厳しいものでしたが、勉強はとても楽しいものでした。主が道を整え、導いて下さったのでした。主の道は、どんなに曲がりくねった遠回りの道でも、真つ直ぐな道なのです。道は一つにながっているのです。卒業後、南三鷹教会に招かれました。

### 旧約の「箴言」で教えられる知識でなく知恵

さて、今日与えられた聖書の言葉は、旧約聖書の箴言にある言葉です。箴言とはずいぶん難しい日本語を充てたものですが、ことわざ、格言のことです。格言とは、人間が経験したことで、後世に残す価値のあることを親から子へと語り継いだものです。箴言はユダヤ、イスラエル、またエジプトなどの近隣諸国で語り継がれていたことわざを集めた格言集です。



(前頁からの続き)

日本で知られた格言集に、貝原益軒という江戸時代の学者が書いた「養生訓」という本があります。「養生訓」は「腹八分に医者いらず」など、食事に関したることだけでなく、人が健康に過ごすことを目的とした格言集ですが、聖書の箴言はどのような目的の格言集でしょうか。1章2節以下に箴言の目的が書かれています。

「これは知恵と論しをわきまえ、分別ある言葉を理解するため、論しを受け入れて正義と裁きと公平に目覚めるため、未熟な者に熟慮を教え、若者に知識と慎重さを与えるため」

箴言は人生の経験が浅い若い人たちに向けて、道を誤ることなく、正しい道を歩むことができるようにすることを目的として書かれているのです。格言を理解し、受け入れ、実行するためには、知恵が必要だと言っています。知識でありません。「知恵」です。

では知恵とはなんでしょう。知恵と似た言葉に知識があります。違いはなにかと言くと、知識は人間が経験によって獲得するもの、

知恵は神から与えられるもの、と

私は考えています。私たち人間は神様から与えられた素晴らしい能力によって、経験を積み、知識を増し、知識がまた新しい知識を生み出しました。知識は人間を他の被造物をはるかに凌ぐ集団に作り上げました。しかし、そこには大きな落とし穴がありました。知識を積み上げることにより、神の領域に達せると思い込んでしまったのです。人間の弱さです。知識によって神様を越えることができると考えてしまったのです。

創世記にパベルの塔の出来事が書かれています。レンガを焼き固めることによってレンガの強度が増し、これまで達成できなかった高さを超えてレンガを積み上げることができるようになりました。知識で造られた丈夫な焼きレンガを積み上げて「天まで届く塔」を造ろうとしたのです。人間は神になれどと誤解して神になろうとしたのです。人が神になろうとすること、これほど大きな罪はありません。しかし、歴史を振り返れば、人が神になろうとしたケースがいく

らでもあります。しかし、その試みが成功したことはありません。神の被造物である人間が神になれるはずがないのです。

人間が経験によって獲得した知識は完全でも絶対でもありません。誤りもあります。ですからわたしたちが正しく主の道を歩むには、神に源があり、聖書で語られている神から与えられる知恵によらなければならぬのです。

8章22節「主は、その道の初めにわたしを造られた。いにしへの御業になお先立って。」

ここで「わたし」と言っているのは、知恵のことです。22節以降では知恵は天地創造の前に生み出されたと言っているのです。先ほど知識は人間が経験から獲得するものですが、知恵は神から与えられるものと言いました。知恵は神に源があり、神そのものなのです。そして、神が生み出した知恵とは、とりもなおさずキリストのことなのです。

8章22節〜27節まで、「わたし」を「キリスト」に置き換えて読んでみましょう。何かお気づきのこ

とがありませんか。どこかで読んだような……。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずになつたものは何一つなかった。」

そう、箴言の言葉は、ヨハネによる福音書に引き継がれているのです。

箴言は、信仰の導き手としての格言集です。なかには現世利便的な格言もありますが、それらも人間的な思いから出て来た格言で、から見た思いから出て来た格言です。箴言はもともと若い人たちを教育するための格言集でしたが、年齢にかかわらず全ての神の民への言葉です。

わたしたちは全員、神様の前では信仰的には若者なのです。心を開いて謙虚に箴言の言葉を聞き、神の民であることを喜びましょう。「主を畏れることは知恵の初め」(1章7節)なのです。

(出席27名。文責・編集委員会。要約担当・市川義和)